

1. 後三年合戦絵巻

一巻
紙本着色

縦四六・〇 横一〇一八・〇
江戸時代中期写

応徳三（一〇八六）年に東北地方で起きた「後三年の役」と呼ばれる戦乱の様を描いた絵巻物。同合戦は、東北地方に勢力を誇っていた清原一族の内紛に端を発し、源義家の介入も加わり争乱が拡大し、結果的に清原氏の没落と奥州藤原氏の台頭の契機となった戦乱である。

原本の『後三年合戦絵詞』（国指定重要文化財）は、現在東京国立博物館が所蔵し、上・中・下三巻十五段の構成で、源義家と清原家衡・武衡の戦いを中心に、義家の出陣から戦後処理までを描いている。

館蔵の本資料は、卷子一巻のみであり、内容は上巻に限られ、詞書はなく絵のみである。
(H. Y.)

2. 遊行上人縁起絵

一巻

紙本着色

縦三八・六 横九二六・〇

江戸時代後期写

伊予河野氏一族に生まれ、全国を旅して念仏を勧めた一遍の生涯を描いた絵巻。

一遍は、延応元（一二三九）年に道後宝厳寺に生まれましたと伝えられる時宗の開祖で、紀伊国（和歌山県）熊野本宮での神託によって、六字名号「南無阿

弥陀仏」を書いた念仏札をくばる賦算の信念を得たといわれる。南は大隅国（鹿児島県）から北は陸奥国江刺（岩手県）あたりまで旅し、念仏勧進をすすめ、信濃国（長野県）佐久郡小田切の里で初めて踊り念仏を行い、民衆から支持を受けるようになった。

一遍の生涯を描いた絵巻として、異母弟聖戒編纂の『一遍聖絵』、時宗僧宗俊編纂の宗俊本『遊行上人縁起絵』の二系統がよく知られている。「宗俊本」の原本はすでに失われて写本のみ伝存しているが、本資料はその写本の一つで、京都市金蓮寺の写本を冷泉為恭が江戸末期に写したものと伝わる。残念ながら、全巻揃いではなく、熊野本宮の場面などを描く第一巻の第一・二段を「一之上」として描いたもののみだが、虫損にいたるまで忠実に模写しているのは興味深い。
(H. Y.)

3. 絵師草紙

一巻

紙本着色

縦三〇・一 横六〇四・五

江戸時代中期写

朝廷から伊予に所領を拝領した一人の絵師をめぐる出来事を描いた絵巻。原本は、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵で、鎌倉時代末期の作とされ、詞書と絵を交互に配する三段構成で、一巻仕立てである。館蔵の本資料では絵が先に、詞書が最後までとめられ、しかも詞書は第一段内容の後に第二段の後半内容、第三段の前半内容の後に第二段内容が書き継がれた二段構成にされ、錯綜が見られる。模写時の底本にすであつた錯綜を示す痕跡である。

第一段では伊予に所領を得た絵師の喜び、第二段では在地の実情を知った悲嘆、第三段では遠い伊予から近い所領に替えてもらう要望をするも梨の礫という様子が描かれ、最後にこの窮状を絵にして訴え申しますと結ぶ。

ちなみに、伊予に与えられた土地とは、描かれた繪旨の文言の「伊予國」の下に「得」と推定される文字が読み取れることから、桑村郡得能保（西条市丹原町徳能）と考えられている。
(H. Y.)

4. 虎関師鍊像（愛媛県指定有形文化財）

一幅

絹本着色

縦一一三・〇 横五五・〇

南北朝時代

常定寺蔵・当館保管

虎関師鍊は鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての臨済宗の僧で、京都に生まれ、南禅寺・東福寺などに歴任し、国師号を受けた高僧。詩文にたけ、また多くの著書もあり、中でも仏教史書『元亨釈書』は有名。このような禅僧の肖像を「頂相」という。常定寺（西予市宇和町）を創建した回塘重淵が師事し、同寺の開山（第一世）に請じたことに由来する肖像だと思われる。賛らしき跡も見えるがはつきりしない。寺伝では兆殿司の筆と伝えられている。南予では他に、やはり開山として請じられた鬼北町龍淵寺に伝わる木像虎関師鍊椅像が知られており、彼の教えを継承する禅宗寺院が点在したことをうかがわせる。
(H. Y.)

5. 回塘重淵像 (愛媛県指定有形文化財)

一幅

絹本着色

縦一一三・〇 横五五・〇

室町時代

常定寺藏・当館保管

常定寺(西予市宇和町)を創建した回塘重淵の肖像画。彼は室町時代初期(南北朝期)の南予の禅僧

で、宇和に生まれ、虎関師鍊国師に師事し、同寺創建時に国師を開山に請じ、自らは二世となった。上部に東福寺四十三世性海靈見の賛がある。当時

禅宗では独立の際に師の肖像画と印可状が与えられたが、虎関師鍊像とともに同寺に残る禅僧の肖像画(頂相)も、中世南予地域での禅宗の広がり的一端を示す資料といえる。

(H. Y.)

6. 得能氏歴代肖像

一卷

紙本着色

縦三二・七 横二四〇・六

江戸時代

中世伊予の領主河野氏の支族得能氏を中心に、六人の肖像を描き、巻子に仕立てたもの。第一紙に和歌を記した後、第二紙に「伊豫守越智宿祢通清」として束帯姿の男性の座像、以下第三紙「河野備後守通純」、第四紙「河野備後守通綱」、第五紙「河野伊豫入道道治 諱通村」、第六紙「河野伊豫守通政」、第七紙「河野弾正大弼通言」と、いずれも甲冑姿の武者像が描かれている。第七紙の後ろに糊跡

があることから、本来第七紙以降も続いていたと推定できる。

「通清」は平安時代後期の河野氏惣領。通純・通綱・通村・通政・通言は、河野通俊を祖とし、鎌倉末期に倒幕勢力、南北朝期には南朝方として活動したことによく知られる、桑村郡得能保(西条市丹原町徳能)を本拠とした得能氏の系図に見える人物。

成立事情は不明だが、後世からの懐古により生み出された絵画であろう。

(H. Y.)

7. 酒飯論絵巻

一卷

紙本着色

縦三四・五 横八二六・〇

江戸時代後期写

酒飯論絵巻は、16世紀中頃に成立したとされる。本絵巻は江戸時代後期の写しで、詞書を欠く。酒好き(上戸)と飯好き(下戸)、酒と飯の両方好きな者(中戸)がそれぞれの長所を競い、中戸がよいと

説く内容である。これらは法華宗と一向宗、天台宗の宗教対立を暗示しているとされる。場面は囲碁、上古の宴会風景、酒が入れられた桶や樽、下戸の食事風景、精進料理の台所風景、中古の食事風景、鳥や魚を準備する調理場などが吹き抜け技法で描かれている。衣装や調度品なども細かく丁寧に描かれ、茶道具、座敷飾り、唐物の青磁盤、赤や黒の漆器、金属器、曲物などの木製品など使われた具体的な品々をみる事ができる。宴会、食事風景、調理の様子などを窺い知ることができ、風俗画の初期の絵画資料として評価される。

(H. I.)

8. 百鬼夜行絵巻

一卷

紙本着色

縦三六・五 横一〇七八・〇

江戸時代後期写

最初の場面では、青鬼と赤鬼が走り、その鬼に追いかけられるように様々な妖怪が描かれている。これらの妖怪は、鍋や釜といった昔の生活で使っていた道具をもとにして、不思議な姿に表現される。そして妖怪たちがユーモラスに行進し、絵巻の最後の場面は、赤く輝く物体が描かれる。これは太陽とも、仏の力の火炎ともいわれ、それに妖怪たちが追い立てられる姿で終わる。この絵巻物に描かれた妖怪には、河童や山姥といった、よく知られた妖怪はでてこない。古い道具が変化した妖怪中心である。「百鬼夜行絵巻」は全国で六十以上の諸本が確認されており、大きく分けて1真珠庵本、2国際日本文化研究センター本、3京都市立芸術大学本、4兵庫県立歴史博物館本の4種類に分類される。この愛媛県歴史文化博物館本は、1の真珠庵本の図柄に加え、4の兵庫県本(「百鬼夜行絵巻」)に見られる器物系の妖怪(付喪神)の図柄も多く描かれており、他の諸本より描かれる妖怪の数は多い。

(T. O.)

9. 西国海路図絵巻

一卷

紙本着色

縦三九・八 横七八二・〇

江戸時代中期

大坂より長崎にいたるまでの海路を中心に描いた絵巻。各地の城郭・神社仏閣・集落などを丁寧に描き、地名を詳細に記している。航路は朱線で示されているが、遠距離の太線と近距離の細線が組合わさり、網の目のように瀬戸内海に展開していたことがうかがえる。また、青・緑・銀色を使い、「見え瀨」「かくれ瀨」など航海上危険な場所を色分けで示して、航海者の便を図っている。伊予関係の航路としては「かまかり（蒲刈）よりつわ（津和）」「ごご（興居）しまよりつわ」「つわより上の関」

（J. I.）

10. 西国船路海路図

四帖
紙本著色

縦二九・二 横一八・二（閉）
享保四（二七一）年写

享保四年に坂上是治が矢部家に伝わった海瀨舟行を写したもの。海瀨舟行は寛文七（一六六七）年に江戸幕府による中国・四国・九州の沿岸調査に参加した衣斐玄水が、その時の資料をもとに延宝八（一六八〇）年に作成した。

本資料は四帖からなるが、掲載図版はそのうちの「南海航路図 秋」で、淡路島から始まり、四国沿岸が左まわりに描かれている。その特徴としては、海岸線を帯状に長く描き、それらの屈曲した海岸線を図幅中に収めるために、紙を斜めに継ぐなどの工夫がされている点や、海岸の城郭・神社・仏閣が絵画的に描かれ、港の状況、潮流の状態、航海の目標などを詳細に注記している点が挙げられる。着色は海が青、陸が無着色、山が緑、断崖が茶で、朱線で

航路が描かれている。

（J. I.）

11. 駿河より五島まで海陸路程図

一巻
紙本著色

縦五七・九 横五四三・五
江戸時代

ランドマークとして、城郭・神社仏閣・名所・峠・湖などを描く。国境を黒線で示し、さらに沿岸部を国別に色分けすることで、それぞれの土地がどの国に属しているのか一目で分かるように工夫されている。

航路は朱線で示し、主要な港間の距離も記されている。小島・洲・瀬・渡しをはじめ、沿岸部の地名、島名の情報も詳細に記されている。その一方で、陸路は東日本の東海道など主要街道を黄色、脇街道を赤で示しているが、西日本の情報は示されていない。

瀬戸内海航路絵図のなかでも、本資料の似た描写のものは他の所蔵機関でも多く確認されている。そのほとんどが江戸〜大坂〜長崎までを描く構図となっているが、本資料は一部欠落しているのか、東は駿河までしか描かれていない。

（J. I.）

12. 東海道西国筋図巻

一巻
紙本著色

縦三六・七 横一二二七・〇
江戸時代後期

江戸から東海道を通り、瀬戸内海、九州の対馬に至る城郭・神社仏閣・名所旧跡が描かれている。城郭はどれも同じように描かれており、写実的なものとはいえない。海上交通の大動脈、瀬戸内海には参勤交代の御座船が進む。水墨の横点を連ねて山を表す米点、輪郭線を用いずに墨の濃淡だけで表現する没骨法など、南面の画法が用いられており、鑑賞用に制作されたものと考えられる。

（J. I.）

13. 大日本海陸名所図会

一巻
錦絵大判六枚続

縦三五・四 横一五〇・〇
歌川貞秀画 元治元（一八六四）年

歌川貞秀が下関から安芸宮島までの海岸を描いた浮世絵。右手の下関の対岸には九州、左奥には四国を見渡せる。貞秀独特のパノラマ風の構図で、瀬戸内海の風景が描かれている。下関から長府・室津・岩国にかけての町並みの景観や、壇の浦の古戦場、岩国の錦帯橋、宮島の厳島神社などの名所が詳細に描かれ、見ているだけで江戸時代の瀬戸内海を旅している気分になる。

（J. I.）

14. 六十余州名所図絵 伊豫西條

一枚
錦絵大判

縦三六・二 横二四・七
歌川広重画 安政二（一八五五）年

画面中央に四国最高峰の石鎚山を置き、その麓には西条藩松平氏三万石の陣屋町西条、右手前に白帆をまきあげた廻船を配している。本資料は淵上旭江の『山水奇観』より図柄を借用しているが、近景に廻船の帆を大きく描き込むなど、広重の工夫の跡が見える。画面上では城郭が描かれているが、実際には西条では城郭は作られず陣屋があった。

(J. I.)

15. 諸国六十八景 伊豫石槌山

一枚

錦絵中判

縦二五・〇 横一八・二

二代歌川広重画 文久二(一八六二)年

14と同じく四国最高峰の石鎚山を描いているが、本資料は淵上旭江の『山水奇観』の図柄をほぼそのまま錦絵にしている。サイズも中判と一回り小さく、各地の名所を手軽に楽しむ観光絵葉書のようなものともいえる。

(J. I.)

16. 御船印角判摺物

一帖

木版色刷

縦二二・二 横一八・七(閉)

江戸時代後期

西国・四国・九州の諸大名の御座船を描いた摺物。木版色刷で、三二枚が一帖に仕立てられている。大名ごとに帆印・船幕が描き分けられているが、船の形や背景の表現は形式化している。絵師の

名前としては、湖里・蓼水・蛙夢が記されている。伊予の大名では、「伊豫今治三万五千石松平駿河守様」「伊豫吉田三万石伊達若狭守様」「伊豫新谷一万石加藤大蔵少輔」の三つの藩の船が描かれている。

(J. I.)

17. 中国四国名所旧跡図

一冊

紙本著色

縦二九・六 横四四・五

西文画 江戸時代後期

中国四国名所旧跡図は、四国遍路をした人物がその土地土地で描いたものを綴じ合わせたものと考えられる。札所の寺院をはじめ弘法大師ゆかりの旧跡など、様々な風景が描き出されている。その描写は現在の我々の目から見ると写実的とはいえないが、デフォルメさせながらも対象の本質をとらえる力強さが感じられる。

本資料の一枚に、大和国田原本(奈良県田原本町)の仏絵師西丈が三津浜の商人松井忠三郎(唐松屋)と出会い、意気投合して和歌のやりとりをした様子が描かれているが、この仏絵師こそがスケッチの作者と考えられる。仏画を描く専門の絵師の目は、江戸時代後期の四国の姿をリアルにとらえている。

(J. I.)

18. 西條誌

二〇冊

典籍

西条藩九代藩主松平頼学の命により、藩の儒学者日野和煦が助編者四人の協力のもと編纂した地誌。編纂にあたり和煦は宗藩である和歌山に行き、風土記局でその編纂手法を学んだ後、領内各村から提出させた「惣改帳」「差出帳」などの基礎資料に領内の実地調査を加えることで、七年の歳月をかけて二十巻からなる西條誌を完成させた。

新居・宇摩・周布郡のうち西条藩領の七十町村について、村内沿革に始まり、村境・家数・人数・船数・産業・用水・神社仏閣・堂庵から旧家・長寿者・孝子に至るまで、村ごとに詳細な情報が記されている。また、文章だけではなく、要所に樋之口分庄屋国平有同が描いた彩色の精密な絵図が挿入され、江戸時代後期の西条領内の姿をヴィジュアルに知ることができる。

西條誌は江戸に三部、西条に二部の合計五部の浄書本が作成された。本資料はそのうちの一部であり、「西條邸図書記」の朱印があることから、江戸常府の西条藩の役人が領地のことが分かるように江戸藩邸に備えられていたものである。それとは別に、雲母摺りの料紙が使われ、絵図の質も高い西條誌を西条市教育委員会が所蔵しているが、この豪華本は藩主が手元に置いてながめていたものと思われる。

(J. I.)

19. 愛媛面影

五冊

典籍

縦二四・九 横一七・五

縦二六・八 横一八・八
天保一三(一八四二)年

20. 面白滝画賛

絹本着色 一幅

今治藩医で国学者の半井梧菴が著した私撰地誌で、『古事記』に記された「愛比売」に、現在県名となつてゐる「愛媛」の文字を初めて宛てたことと知られる。慶応二（一八六六）年の序文には、梧菴が伊予国風土記の散逸したことを嘆き、新しい風土記の編纂に取り組んだことが記されている。また、梧菴の略歴を記した「半井忠見小傳」にも、公務のかたわら各地を歩き回り、史書の調査や古老からの聞き取りをして、十数年の歳月を費やし慶応二年に脱稿したと記されている。

梧菴の筆は伊予の全郡に及び、東予から南予へ各郡ごとに城下町・陣屋町・在郷町・城郭・神社仏閣・名所旧跡・物産などが紹介されている。書く項目は梧菴の主観により取捨選択されており、自分の生活圏である越智郡の記述が多いなどの偏りも見られる。それでも伊予一国をカバーする内容となつてゐるのは、編纂にあたり梧菴と交流のある地方文人のネットワークが機能したからに他ならない。

『愛媛面影』は、江戸時代後期に流行した名所図絵のスタイルにならない、名所旧跡を描いた挿絵を随所に入れてゐる。その挿絵を担当したのは、松川半山と林澗光の二人の絵師である。松川半山は江戸時代後期から明治初期にかけて活躍した大坂の浮世絵師で、名所図絵を中心に多くの挿絵を手がけた。

『愛媛面影』では巻頭の「伊予国全図」をはじめ、四つの挿絵を確認できる。それ以外のほとんどが小松の絵師の林澗光によるもので、谷文晁派の絵師らしい緻密な描写により伊予の名勝を描き出している。

(J. I.)

21. 石鎚画賛

紙本着色 一幅

理図誌の記念碑的な作品ともいえ、「愛媛面影」における梧菴と澗光の協力関係が、地理図誌の編纂過程にも引き継がれていたことを物語つてゐる。

21. 石鎚画賛

紙本着色 一幅

林澗光画、半井梧菴賛 明治七（一八七四）年頃 個人蔵・当館保管

断崖絶壁を分かれたり合わさったりしながら流れ落ちる滝。滝の下には赤い毛氈をひいてくつろぐ人々が見える。そのうちの四人は洋装で、一人は遠眼鏡のようなもので滝を眺めている。毛氈の上では重箱が開かれ、これからまさに宴が開かれようとするところ。毛氈の脇にも一人いるが、煎茶を準備しているところであろうか。幕末から隆盛した文人画の系譜を引く作品といえる。

『愛媛面影』で挿絵を担当した林澗光が描き、半井梧菴が「碧梧菴主人」の号で賛を加えている。明治五年八月、『愛媛面影』の実績を評価した石鉄県は梧菴を「地理図誌編輯御用掛」に任命し、「地理図誌稿本」の編纂を開始している。梧菴の賛には十月に、この地理図誌の調査で津根村（四国中央市）を訪れて明石敬武の家に一泊、面白（都良白）滝に案内されたことが記されている。面白滝まで一緒に行った人物として、武司、喜多川、林澗光の三人の名前が挙げられているが、武司重淵と喜多川久澄はいずれも地理図誌掛である。

ところで、地理図誌掛にはもう一人林丑之助（丑輔）という人物がいたことが知られている。林は測量・絵図ともに達人な人物で、地理図誌では郡別地図と挿絵を担当していたとされている。「地理図誌稿本」を確認すると、この面白滝の絵がそのまま挿絵として掲載されていることから、林澗光と林丑之助は同一人物と判断することができる。本資料は地

四国最高峰、石鎚山の御山開きの様子を描いている。高くそびえ立つ石鎚山に、豆粒のように小さい人間がたくさん取り付いている。石鎚登拝のクライマックスともいえる一の鎖、二の鎖、三の鎖の急斜面を登る人々。「ナンマイダー」と唱えながら鎖をかける人々の声が聞こえてきそうな絵画である。

本資料も『愛媛面影』を生み出した名コンビ、半井梧菴と林澗光の手がけている。梧菴の賛には、石鎚画賛が描かれた経緯が記されている。石鎚山上に安置する神像を讃岐の高松で鑄造し、明治七年七月八日に石岡神社神官の玉井忠寛が奉遷した。その時に諸国から集まった信者が熱狂して、拍手礼拝するとともに、雨が降ることく賽銭を投じた。下山後にこの話しを聞いた澗光が想像して描き上げた。

梧菴は明治五年八月二〇日に石鎚神社の祠官になり、石鎚山の神仏分離を強行していく。本資料には神像を多くの信者が支持する姿が描き込まれているが、石鎚神社の確立を目指す梧菴は、そこに石鎚山の理想的な姿を見出しついでといえよう。

(J. I.)

22. 別子銅山図巻 (複製)

ベっしどうざんずまき

(複製)

一卷

コロタイプ印刷

縦二七・八 横五二九・〇

明治二六(一八九三)年跋

別子銅山は日本を代表する銅山で、元禄四(一六九二)年の開坑以来、昭和四七(一九七二)年に閉山するまで、約二八〇年にわたり大阪の住友家により採掘が行われた。本資料は別子銅山における銅の採掘から精錬までの過程を描いた絵巻である。作業風景は江戸時代後期の『鼓銅図録』をもとに描かれているが、険しい山道のなか生活物資や荒銅を運ぶ仲持など、『鼓銅図録』には見られない絵も含まれている。巻末には明治一四年の写真をもとに描かれた新居浜口屋の絵と住友家の総理代人であった広瀬幸平の跋文がある。

(J. I.)

23. 別子鉱山図巻

べっしこうざんずまき

一卷

絹本著色

縦二四・六 横七六四・〇

西院齋画 明治一八(一八八五)年

別子銅山で鉱石が採掘され、銅に精錬されていく過程は、住友家が作成した『鼓銅図録』などに描かれているが、それらはいずれも江戸時代の作業工程を表しているのに対して、この絵巻は明治一八年段階の工程が十九の場面に分けて描写されている。

この時期はフランス人の鉱山技師ラロックがまとめた「別子鉱山目論見書」をもとに、鉱山の近代化

が進められた時期に当たる。東延斜坑の馬による巻揚機もラロックが計画したもので、明治二二年の蒸気巻揚機が導入されるまでは、馬が巻き口クロを廻すことで、レールを走るスキップカーを引き上げ、鉱石や土砂を運び出した。また、絵巻には坑口から焼鉱までの運搬を合理化するために、明治五年に導入されたトロツコも描かれている。鉦吹の図では炉の壁面にレンガが使われていることが分かるなど、近代化の歩みを始めた別子銅山の様子を伝える貴重な資料といえる。

(J. I.)

24. 道後温泉絵図

どうごおんせんえず

一冊

紙本著色

縦一一九・五 横二二九・五

江戸時代後期

道後温泉を中心に、旅館・土産物店などがならぶ湯之町の町並みを北側から俯瞰して描いている。

絵図の左側中央に描かれた道後温泉は平屋で、一の湯(武士、僧侶用)・二の湯(婦人用)・三の湯(庶民男子用)に分かれている。さらに、温泉施設としてはその背後に養生湯、右側に馬湯があり、馬湯の近くには御札場、番所が見える。絵図中央の下寄りに明王院の建物が大きく描かれているが、明王院は修験道場で、宿屋株や他国から入浴者の管理などに当たった。その他、温泉場周辺の観音堂、湯神社、湯月八幡(伊佐爾波神社)、宝蔵寺などの神社仏閣も丁寧に描かれている。

絵図には「明王院」「観音堂」「庄屋」「御出町」「梅木権現」「社家」の貼り紙もあり、江戸時代後期の道後について、周辺部も含めてよく捉えて

いる。

(J. I.)

25. 道後温泉鳥瞰図

どうごおんせんちようかんず

一枚

木版色刷

縦三七・五 横五三・〇

編輯愛媛県津田安次郎

出版大阪府厨万蔵

明治一四(一八八二)年

明治五(一八七二)年に老朽化した一、二、三の湯は、二階楼(神の湯)に改築された。当時の入浴料は、一の湯が昼五厘、二、三の湯が昼一厘だった。また、明治一一年に特別湯として三階楼の新湯(霊の湯)が新築された。

二階楼(神の湯)、三階楼(霊の湯)、養生湯を中心に、牛湯、玉の石のほか、湯神社等の建物も詳細に描かれている。人力車に乗った人、傘をさした婦人、馬を連れた人など、多くの人々が集い、賑わっている。

(M. H.)

26. 伊予道後温泉之図

いよどうごおんせんのず

一枚

石版刷

縦三八・五 横六三・二

編集兼発行富田弥六郎

明治二六(一八九三)年

明治一一(一八七八)年建築の三階建て新湯、明治二五年改築の二階建て養生湯、神の湯を中心に、

伊佐爾波神社、宝巖寺、道後の町並みが描かれている。

ちよūdō明治二五年から神の湯は改築工事中で、明治二七年に落成する。そのためか、大屋根に置かれた白鷺の塔屋は描かれてない。まさに過渡期の作品である。

入り口はアーチ形でガス塔と思われるものが付けられており、道後温泉にも文明開化の波を感じる。

(M. H.)

27. 吉田祭礼絵巻

よしださいれいえまき

一巻
紙本著色

大正五(一九一六)年写

縦一九・二 横八七二・〇

宇和島市吉田町の八幡神社の祭礼を描いた絵巻。

吉田祭は現在、毎年十一月三日に行われる。江戸時代から賑やかな祭礼として有名で、現在でも鹿踊や牛鬼、人形山車(地元で「御車」もしくは「練り車」と呼ぶ)、船型山車(「御船」)、四ツ太鼓、七福神など様々な練物が登場する。本資料は、天保六(一八三五)年の原本を、大正五年に当時地元の高等小学校二年であった中野恒吉が写したものである。牛鬼、鹿踊、ホタなど愛媛県南予地方各地の祭礼に登場する独特の練物が描かれており、江戸時代の祭礼の様子がわかる資料として貴重である。吉田祭礼絵巻は八幡神社・宇和島市立吉田図書館・伊予史談会がそれぞれ所蔵している。各絵巻とも山車や練物の種類、順番はほぼ同一であるが、山車を曳く人数、見物人の有無などに若干の相違がある。

(T. O.)

28. 伊予国写生帖

いよのくにしやせいちようづ

八冊

紙本淡彩

縦二六・五 横一九・〇

中島華鳳画 大正元(一九一二)〜四年

大正元年と三、四年に愛媛を旅行した京都出身の画家中島華鳳が描いた写生帳。松山城・大山祇神社・石鎚山などの愛媛を代表する名所をはじめ、大山寺・石手寺などの四国遍路の札所、西条の農作業や三津浜の漁業などの生業、砥部焼の製造・絵付や市之川鉾山などの産業が、水墨や淡彩で生き生きと描かれている。

中島華鳳は円山派の画家で、慶応二(一八六六)

年の生まれ。森寛齋に学び、書を富岡鉄斎に学んでいる。内国勸業博覧会、シカゴ博覧会などに出品し、京都において屏風、屏障を多く描いた。京都国立博物館には華鳳が描いた富岡鉄斎の肖像画があり、鉄斎との深い関わりがうかがえる。鉄斎自身、夫人の春子が愛媛出身であったため、度々愛媛に滞在し、三津浜の朝市を描いた名作「三津浜漁市図」を制作している。華鳳もあるいは鉄斎とのつながりで愛媛を訪れ、数々のスケッチを描いたのであろうか。

(J. I.)

29. 瀬戸内海遊覧絵図

せとないかいゆうらんえず

一点

印刷折本

縦二五・〇 横一〇七・〇

吉田初三郎画 大正一四(一九二五)年

大阪商船は大阪と別府温泉を結ぶドル箱路線、瀬戸内海航路の絵図に初三郎を起用した。絵図は、本州上空から四国を見下ろすように描かれている。瀬戸内海沿岸の港町を結ぶ航路が色とりどりの線で表現されており、それがあたかも虹のように見える。

(J. I.)

30. 石崎汽船航路御案内

いしざきせんこうろごあんない

一点

印刷折本

縦一九・〇 横七五・七

吉田初三郎画 昭和二(一九二七)年

同じ年に発行された「松山道後名所図絵」よりも高い視点にたち、松山、大三島、巖島の瀬戸内海西部の観光地を巧みな位置取りで描いている。石崎汽船の依頼により作成したもので、他の鳥瞰図に描かれていた大阪商船の船は姿を消し、尾道や宇品への瀬戸内海の航路を石崎汽船の船が進む。同じ絵柄で、表紙に「伊予道後温泉と松山大三島」と記されたものも作られている。

(J. I.)

31. 道後松山御案内

どうごまつやまごあんない

一点

印刷折本

縦一七・四 横七六・七

吉田初三郎画 大正五(一九一六)年

伊予史談会が発行したもので、吉田初三郎の鳥瞰図としては比較的初期のものである。初三郎独特の

デフォルメはされておらず、色づかいもおとなしい。松山の沖合には、関西方面から続々と観光客を運ぶ、煙突に「大」の船印が入った大阪商船の船が見える。陸路には伊予鉄道、松山電車の路線が描かれ、そこにはかわいらしい坊っちゃん列車らしき姿もある。

(J. I.)

32. 松山道後名所図絵

一点

印刷折本

縦一九・〇 横九五・三

吉田初三郎画 昭和二(一九二七)年

昭和二年は国鉄が松山まで開通した年。「道後松山御案内」にはなかった国鉄の線路が新しい要素として加わっている。右上には遠く台湾、左上には富士山まで画面におさまる大胆なデフォルメ。これぞ初三郎の鳥瞰図といえる。画面中央に松山のシンボルといえる松山城を置き、伊予鉄道の市街電車がお城をぐるりとまわり道後温泉まで延びる。松山市駅の伊予鉄道本社や道後温泉の建物など細かい部分も、リアルに描き込まれている。

(J. I.)

33. 観光の道後

一点

印刷折本

縦一八・〇 横七六・八

岡野翠山画 昭和一一(一九三六)年

道後温泉事務所と道後観光協会が発行した観光パ

ンフレット。鳥瞰図は松山市在住の岡野翠山が描いている。吉田初三郎の構図に比べ、やや大胆さに欠けるが、淡い色づかいで松山市街の名所を丹念に描き出している。梅津寺には飛行場ができていたが、これは昭和四年に開設されたもの。四人定員の水上飛行機が大阪木津口まで飛んでいた。

(J. I.)

34. 松山市鳥瞰図

一点

印刷折本

縦一七・五 横五〇・四

吉田初三郎画 昭和二六(一九五二)年頃

吉田初三郎が戦後の松山を描いた鳥瞰図。松山城を中心に市街地を大きく描き、右に道後温泉や石手寺、中央上部に戦後発展を遂げる石油化学の工場群、左に行楽地の面河溪を配している。昭和二〇年七月二六日、松山市は空襲により市街地の多くを焼いているが、鳥瞰図が描かれたのはそれから数年後のこと。市街地にはランドマークとして官公庁・学校などが目立つばかりで、ビルなどの背の高い建物がほとんど見当たらない。鳥瞰図には「松山の概況」として人口十七万四千人、四国最大の中都市で、気候温暖、風光明媚な温泉地と記し、焦土から復興した松山の観光をアピールしている。

(J. I.)

35. 久万面河大観

一点

印刷折本

縦一五・八 横四五・〇

金子常光画 昭和四(一九二九)年
吉田初三郎の弟子として期待されたが、後に初三郎から離反、日本名所図絵社を旗揚げた金子常光の鳥瞰図。手前に当時「四国の軽井沢」と称された久万の町並み、奥に面河溪から石鎚山にいたる雄大なパノラマ風景が開けている。当時の面河溪への交通手段は乗合自動車。鳥瞰図にも面河溪を遊覧する乗合自動車の姿が見える。

(J. I.)

36. 天下第一の絶勝面河溪

一点

印刷折本

縦一七・五 横七六・三

吉田初三郎画 昭和一〇(一九三五)年

ライバル金子常光は久万の町並みと面河溪を対等に描いたが、吉田初三郎は石鎚山を頂上とした面河溪を全面に描き出している。紅葉の染まる大森林の山並み、蛇行する面河川沿いに次々に立ち現れる奇岩の岩壁。初三郎の筆は天下第一の絶勝面河溪の魅力余すところなく伝えていく。

(J. I.)

37. 史蹟と景勝の大洲町

一点

印刷折本

縦一六・九 横七六・七

金子常光画 昭和一〇(一九三五)年

金子常光が描いた大洲の鳥瞰図。肱川の流れを大

大きくS字に曲げながら大洲の町を画面いっぱいに表示している。肱川沿いの左手、大洲城の城跡にできた城山公園には、なかったはずの天守閣がさりげなく描かれている。養蚕の町にふさわしく煙突から煙を吐き出す数々の製糸工場、山には「メンヒル」「ドルメン」などの巨石が見える。「中江藤樹」「三瀬諸淵」など、地元ゆかりの偉人の史蹟も織り込まれている。

(J. I.)

38. 新興伊与長浜

一点
印刷折本

縦一六・〇 横五三・五
昭和九(一九三四年)年

吉田初三郎から離反したグループが興した日本名所図絵社が作成した長浜の鳥瞰図。画面中央の肱川河口には、長浜のランドマーク長浜大橋が架かっている。長浜大橋は現存する道路開閉橋としては日本最古のもので、絵では船を通すために跳ね上げた状態で描かれている。河口には海外にも輸出されていた木材が集まり、海岸には夏に多くの人でにぎわった海水浴場と、それに隣接してあった水族館が見える。

(J. I.)

39. 八幡浜市

一点
印刷折本

縦一七・二 横七六・三

吉田初三郎画 昭和三(一九三八年)

画面右上の東京方面には富士山まで見え、中央には伊予の大阪といわれた八幡浜の町並みが詳細に描かれている。新港には客船が停泊し、夜昼トンネルをぬけた汽車が八幡浜駅に着こうとしている。夜昼トンネルの完成は昭和一三年で、八幡浜駅まで開通したのはその翌年なので、この鳥瞰図ではそれを先取りして描いている。

裏面には八幡浜の紹介として、海陸交通の要衝に当たり、工業都市、水産都市として発展が目覚ましいと記されている。なお、吉田初三郎肉筆の原図は八幡浜市が所蔵している。

(J. I.)

40. 吉田名所大観

一点
印刷折本

縦一五・八 横四六・二
昭和一六(一九四二年)頃

立間川と国安川に抱かれた吉田の町並みを描いた鳥瞰図。制作は名古屋の沢田文精社。沢田文精社は吉田初三郎が創設した大正名所図絵社の名古屋支部が独立したもので、色彩豊かな鳥瞰図を多く制作した。

吉田駅、立間駅が開業し、国鉄が走っているの
で、昭和一六年以降であることは確かである。また、銀行名が豫州銀行と記されているが、昭和一六年に合併して伊予合同銀行に名称が変わっているの
で、鉄道の開通を契機に作成された鳥瞰図と考える
ことができる。ただし、まだ開通していない八幡浜
と卯之町間の路線が描かれているのは、あるべき未

来の姿を示しているのであろうか。

山にはみかん山が多く描かれているが、紹介文には吉田のみかんは早熟と甘みとで海内一と称され、秋の収穫期には丘から街へ、街から船へと埠頭に黄金の山を築くと記されている。

(J. I.)

41. 東宮殿下行啓記念宇和島交通鳥瞰図

一点
印刷折本

縦一八・四 横九七・四
吉田初三郎画 大正一二(一九二三年)

大正一一年一月の皇太子(昭和天皇)の四国御巡啓に際して、旧宇和島藩主伊達宗城の九男で宮内省式部官の二荒芳徳が随行。二荒は吉田初三郎を同行させ、縁あふれる宇和島を描かせた。宇和島城のある城山を中心に、天赦園・和霊神社・金剛山大隆寺など宇和島藩ゆかりの社寺が周辺に見える。画面左には佐田岬が突き出し、余裕がない右は、ページをめくるようにして、南宇和から高知にいたる海岸線が描かれている。

(J. I.)

42. 観光の南伊豫

一点
印刷折本

縦一八・八 横一〇〇・四
吉田初三郎画 昭和二八(一九五三年)

宇和島自動車吉田初三郎に依頼して制作した鳥瞰図。同時期に宇和島市が依頼した鳥瞰図は宇和島

市街を中心に描いているのに対して、当時のバス路線を反映して南予を中心に、東は松山・高松から東京まで、西は別府、南は室戸・足摺岬までが描かれている。霊峰石鎚山が画面中央の一番高いところにそびえたち、路線をたどりながら周辺の観光地めぐりが楽しめるように工夫されている。

表紙には和霊神社と雪輪の瀧が描かれ、裏面には「山と海の景観に恵まれた情緒溢れる南伊豫の旅」というキャッチコピーが入っている。また、初三郎自身はこの鳥瞰図について、「南伊豫全地域」にわたる景勝山河の大風光裡、本社バスの交通と観光の一大文化記録画と記している。

吉田初三郎は、大正から昭和にかけて全国の観光地を宣伝する鳥瞰図を二千点以上制作しているが、宇和島自動車のもとは最晩年の作品に当たる。既に老齡の初三郎はその作成にあたり、戦前の陸軍陸地測量部の精密地図と写真により下図を作成した。そして、昭和二八年に三二年ぶりに現地入りして鳥瞰図を完成させた。大胆なデフォルメ、地形を大きく歪めて描く変幻自在な作風は、本作品の特徴としても見出せる。なお、本資料の原図は宇和島自動車が所蔵している。

(J. I.)